子ども研究者に「失敗」なし　体当たり実験見守る元教師

ヒルは木から落ちてこない。ぼくらのヤマビル研究記　樋口大良氏（あとがきのあと）

読書　フォローする

2021年10月9日 2:00 [有料会員限定]

保存済み

「何かの第一発見者になれるかも、というのが子どものやる気につながっている」と話す

知らぬ間に登山者の血を吸うヤマビルは、見た目もグロテスクな厄介者だ。小中学生がメンバーの「子どもヤマビル研究会」による体を張った研究成果の数々をまとめた。自らは裏方に徹し、小さな研究者を見守る。「最初はすぐに研究のタネが尽きると思っていたが、終わりがない」と笑う。

小学校教諭として長年、子どもの主体性を伸ばす教育を実践してきた。定年退職後の2011年、三重県・鈴鹿の山をフィールドにヒル研を立ち上げた。ヒルが多く生息し、研究材料が簡単に入手できる。たくさん捕っても嫌がられることはなく、むしろ喜ばれる。

さらに「ほとんど研究者がいないのが、ヒルの一番の魅力」と説く。「何かの第一発見者になれるかも、というのが子どものやる気につながっている」。テーマは興味の赴くまま。血を吸うなら、赤くてドロッとしたケチャップも食べるのか。結局食べなかったが、これも立派な研究成果だ。

首から吸血された被害者も多く、昔からヒルは木から落ちて体に付くと言われてきた。だがヒル研はこの説に疑問を持ち、体当たりで覆した。ヒルがたくさんいる場所に座り、ひたすら待ったが落ちてこない。木登りをするか、木に付けて観察したが全く登らない。

ビニールで体を包み、ばらまいたヒルが首まで登るか。身の毛もよだつ実験だが「子どもたちは、ひょこひょこ歩く姿をカワイイと言っている」。結果は、速いものだとほんの数分で足元から首まで到達した。

設立10年がたち、理系の大学院に進んだ元メンバーもいる。「ヒル研での体験が自分を作ったと感謝されて、とてもうれしかった」としみじみ語る。

ヒル研の良さとは何か。子どもたちが口々に言うことがある。「学校の理科の実験は、最初から答えが分かっている。答え通りにならなければ失敗。ヒル研では答えがないことを実験するので、結果の全てが新発見。だから失敗がない」（山と渓谷社・1430円）

ひぐち・だいりょう　1947年三重県生まれ。京都教育大卒。小学校教諭として京都・三重で勤務。2007年に定年退職後、11年「子どもヤマビル研究会」設立。

保存済み

こちらもおすすめ(自動検索)

汗かきは蚊にモテモテ　血を吸うメスには注意
7月22日